

## 7. 文芸の統一

『文学旬刊』第41期の雑談に鄭振鐸君の話を読み、とても面白かった。彼は云う。

“血と涙の文学を鼓吹するのは、すべての作家に彼がもともと持っていた主義を捨てさせ、一斉にこの方面で努力させることではない。また血と涙の作品以外に、他にいい文学がないとすることでもない。文学は情緒の作品である。われわれは喜んでいる人を強いて泣かすことはできない。ちょうど泣いている人を強いて笑わせることができないように。”

許華天君の『学燈』の「創作の自由」という文章でも、なかなかいいことを言ったことがある。

“わたしは文学の世界では、絶対に自由であるべきだと思う。感情がたまらなくなって漏れる時には、自然と漏らすだけだ。決して誰かが特別な垣根を決めて、それぞれの作者がみなその垣根の中で執筆すべきだなどはあってはならない。われわれから見ると、この世は悲哀に満ちている。しかし恋人の膝枕で眠る人が、全く目覚めていないとも限らないではないか。君は彼が自由に情愛の詩歌を創作することを許さないのか。推し詰めれば、われわれは泣きたい時には、自由に泣くだけだ。誰かが笑いたい時には、自由に笑うだけだ。文学の世界で誰が、泣く作品を許し笑う作品を許さないと規定するのか。”

上に述べられた言葉はみなとても真つ当で、文芸上の統一の不当と不可能を表明するには十分である。しかし世間には一派の評論家が、社会あるいは人類の名によって、社会文学の正統を打ち建てようと、無形のうちに一種の統一を励行しようとしている。創始人の中にはギュイヨー・ベリンスキー・トルストイなどのように、自ずから一家言をなし、それなりの価値があるが、後になると凡百の統一派のようなのは、多くの弊害を免れない。最近『平民』第109期で馬慶川君の「文学者の愉快と苦悶」を見たが、彼の論旨はいま関係なく検討の必要はないが、その中に一節この派の極端な論調を代表できるところがある。彼は云う。

“……もしこうした普遍的な苦悶を感受し、普遍的な精神を慰めることができず、ただ自己の抑鬱と不満の上でしか精進できないとすれば、それは何にもならない。なぜなら彼が感受する苦悶は、彼個人の境遇であり、彼が得るところの愉快も、彼個人の慰めであり、全く人生と関係がない。言い換えれば、彼が表現するものは著者個人の栄枯に過ぎず、人類共有の感情ではないからである。”

この一節の要点は極端に人類共有の感情を強調し自己個人の感情を軽視し、人生と関係ないとするところである。“しかし人類あるいは社会はもともと個人の総体であって、個人を抜き去ってしまうとガランとした無物であって、個人もただ社会の中でこそ安全に生活でき、社会と離れては存在し難い、だから個人外の社会と社会外の個人はいずれも想像できないものである。”各個人の生活の外に別の全体の人生を探そうとしても、その困難はやはり同じである。文学は情緒の作品であるが、著者が最も切迫して感じることもまた自己の情緒でしかない。それなら文学が個人自己を本位とするのは、まさしく当然のことである。個人が人類の一員であるからには、個人の生活は則ち人生という川の流れの一滴であり、個人の感情は当然人類と共有でないところはない。いま多数決を神聖とする時代にあっては、習慣的に個人の意見からその苦楽まで

軽重するに足りない、必ず合唱の叫びがあつて初めて意義があると考えられる。こうした思想は今では勢力があるけれども、道理はない。ひとりの人間の苦楽と千人の苦楽、その違いはただ数の問題であつて、質の問題ではない。文学上では千人の苦楽を書こうが、ひとりの苦楽を書こうが悪いわけではない。それはすべて著者の自由であつて、われわれは少なくとも若干人の苦楽を書かねば合格にはならないと規定することはできない。なぜならいわゆる普遍的な感情とは、質の問題であつて数ではないのだから。個人が感じる愉快あるいは苦悶は、純真で切迫したものでありさえすれば、つまり普遍的な感情であり、たとひ群衆の一時的な感受を超越したものであつても、結局はその普遍性を損なわない。逆に、社会心理に迎合して、至る所で歓迎される『礼拝六』派の小冊子は、その文学価値は依然ゼロに等しい。したがつて人生のための芸術説にもとづいて、社会的意義の基準で文学を統一するのは、やるべきでないし不可能であることはやはり同じである。わたしの意見では、文芸は人生のものであつて、人生のためのものではなく、個人のものである、したがつてまた人類のものでもある。文芸の生命は自由であつて非平等ではなく、分離であつて合併ではない。すべての主張はもしこれに反すれば、どんなに神聖な名前に頼ろうとも、その結果は則ち文芸の生命の破壊であり、平板な虚偽の作品の製造であり、その主張の頹廢の始まりとなる。ヨーロッパの文学史での痕跡は、多くの同じような衰亡を指摘して、二十世紀になつてようやく気がつき、もう文学的潮流を統一しようなどという企画はなく、各派の自由な発展に任せ、日々繁榮に向かっている。この状況は我々の鏡として借用するにたることで、わたしはみんなが統一の空想を捨て、それぞれにその是とするところの実際の仕事を行い、少しずつやり遂げるよう希望する、これこそが自己の一生を充実させる道路である。

※初出：1922年7月11日『晨报副刊』